

『源氏物語』紫上の自称表現

——「我」・「身」表現と自己意識——

Self-Addressing Terms of Murasaki no Ue in *The Tale of Genji*:

How “Ware” and “Mi” Expressions Reflect Murasaki no Ue’s Self-Consciousness

中山 明子

AKIKO NAKAYAMA

ろ」が挙げられるが、三村友希氏は

紫上の「我」の相対化は、若菜巻以降を待たなければならない。
(略) 紫上よりも高貴な内親王の降嫁によつて、その序列が崩
れ、紫上の生き方そのものが相対化されたとき、紫上の「身」
意識が表れたことになる⁽¹⁾

と指摘し、倉田実氏もまた

紫上における「…身」表現は、物語第二部になって始めて使用
されている。(略) 物語第一部の段階では、身意識に関して紫
上は語られることはない⁽²⁾

と指摘した上で、紫上の「身」表現は①女三宮降嫁を受けて「中空

なる身」「数ならぬ身」とわが身を把握するもの、②更に深化し、

一 はじめに

二 紫上の「我」意識

—— 若菜上巻

—— 紅葉賀・胡蝶巻

三 紫上の「身」意識

—— 動揺する紫上

—— 二 紫上の出家願望①

—— 三 紫上の出家願望②

—— 四 紫上と無常の世

四 御法巻の「我」意識

五 おわりに

一 はじめに

『源氏物語』紫上の自称表現としては「我」「…身」「わが身」「ま

述懷される「人よりことなる宿世もありける身」でありながら「ものはかなき身」「人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れる身」と認識される段階、③死を前にした無常感で裏打ちされた心境的な感慨という三つの段階を経ていると述べており、いずれも、若菜巻においてそれ以前に中心的に用いられた「我」から「身」へと自称が変化する点に注目している。

しかし、紫上の「我」表現は彼女の最晩年に再登場しており、若菜巻から十一年もの月日が経過しているからこそ、御法巻の「我」には重い意味があるとも考えられるのではないだろうか。

本稿では、紫上の自称表現に見える彼女の自己意識に着目し、「我」から「身」へという変化で捉えることの問題性を明らかにしていきたい。

尚、以下の二十一場面に「我」は十三例（濔標巻の「我は我」は二例として数える）、「身」は十四例（うち「わが身」は六例）、「まろ」が一例見られる。「うしろめたき絆だにまじらぬ御身」（P）、「わが御身」（Q）については自称ではなく語り手による表現であるが、紫上の自己意識を探る上で重要な用例であると判断し、ここに示した。詳細は三節にて言及する。

また『源氏物語』の引用は阿部秋生ほか『新編日本古典文学全集 ①～⑥』（小学館、一九九四年～一九九八年）に拠り、適宜巻名・ページを示す。傍線は私に付す。

A（紫上ハ）心の中に、我はさは男まうけてけり、この人々（＝女房達）の男とてあるはみにくこそあれ、我はかくをかしげ

に若き人（＝光源氏）をも持たりけるかな（紅葉賀・三三二頁）

B 常にかやうなる筋のたまひつくる心のほどこそ、我ながら疎ま
しけれ（濔標・二九一頁）

C 我はまたなくこそ悲しと思ひ嘆きしか、すさびにても心を分け
たまひけむよ、とただならず思ひつづけたまひて、我は我とう
ち背き（略）

思ふどちなびく方にはあらずともわれぞ煙にさきだちなま
し（濔標・二九三頁）

D 我にていみじう恋しかりぬべきさまを（薄雲・四三九頁）

E 我にても、また忍びがたう、もの思はしきをりをりありし御心
ざまの（胡蝶・一八四頁）

F 今はさりとものとみわが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしけ
る世の、人笑へならむことを下には思ひつづけたまへど（若菜
上・五四頁）

G 我も睦びきこえてあらまほしきを（若菜上・六六頁）

H わが身までのことはうちおき、あたらしく悲しかりしありさま
ぞかし、さてその紛れに、我（＝紫上）も人（＝光源氏）も命
たへずなりなましかば、言ふかひあらまし世かは（若菜上・六

八頁)

I 昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦しく(若菜上・八五頁)

J 我より上の人やはあるべき(略)。わが身には思ふことありけり(若菜上・八八頁)

K 数ならぬ身なむ口惜しかりける(若菜上・九一頁)

L わが身はただ一ところの御もてなしに人には劣らねど、あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなん(若菜下・一七七頁)

M ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど(若菜下・二〇七頁)

N 人よりことなる宿世もありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてややみなむとすらん(若菜下・二二二頁)

O わが身にはさらに口惜しきこと残るまじけれど(若菜下・二四二頁)

P うしろめたき絆だにまじらぬ御身なれば(御法・四九三頁)

Q わが御身をも、罪軽かるまじきにや(御法・四九五頁)

R 惜しからぬこの身ながらもかぎりとして薪尽きなんことの悲しさ(御法・四九七頁)

S まづ我独り行く方知らずなりなむを(御法・四九九頁)

T かくはかなかりける身を惜しむ心のまじりけるにや(御法・五〇一頁)

U (紫上↓匂宮) まろがはべらざらむに、思し出でなんや(御法・五〇二頁)

二 紫上の「我」表現

「二一」若菜上巻

三例の「我」表現と五例の「身」表現(「わが身」含む)が概ね交互に登場する若菜上巻は、言わば自称表現の転換期である。本節では若菜上巻(F→K)における「我」と「身」表現に着目し、紫上の「我」がもつ意味について検討していく。

(F)は「今の年ごろとなりては、ましてかたみに隔てきこえたまふことなく、あはれなる御仲」(五一頁)であつた光源氏から女三宮降嫁を聞かされた際の紫上の思惟である。「さしもあらじ、前斎院をもねむごろに聞こえたまふやうなりしかど、わざとしも思し遂げずなりにしを」(五〇〜五一頁)などと「思ひあが」つて過

してきた「わが身」の油断を反省する紫上は、内心では「人笑へ」を恐れながらも表面では「いとおいらかにのみもてなし」(五四頁)、冷静な対処を試みる。(G)は光源氏と女三宮の婚礼三日目の夜、「さぶらう人々」の「ただならず言ひ思ひたる」ことを「聞きにくし」と思った紫上が女房にかけた言葉である。『新編日本古典文学全集』には「若い宮と童心にかえつて遊びたい、という言い方の裏に、自分の余裕を女房に示そうとする意識もあるう」と注記されており、当該場面からは紫上の自尊心が窺える。(H)は(G)と同日の場面であり、寝所に入ったものの「なほただならぬ心地」がして眠れず、須磨流謫の折の別居生活を思い出すことで「思しなほす」紫上が描かれる。尚、紫上は光源氏の無事だけを切に願ひ、そのためならば「惜しからぬ命」とさえ思っていた当時の自分を「わが身」、「我」も人も命たへずなりなましかば」と、光源氏と対の関係にある者としての自己を「我」と称しており、その使い方には違いがある。光源氏の対として、つまり光源氏の「運命共同体」としての自己を認識した際に用いた自称が「わが身」ではなく「我」であった点は注目すべきではないだろうか。(I)は光源氏から朧月夜との逢瀬を打ち明けられた際の紫上の言葉であり、「わが身」以外の「…身」表現の初例でもある。「中空なる身」とは『伊勢物語』二十一「おのが世々」の「中空にたちある雲のあとなく身のはかなくもなりけるかな」(『新編日本古典文学全集 伊勢物語』一三四頁)によるもので、紫上の抛り所のなさが強調された表現でもある。(J)は紫上と女三宮が初めて対面する場面で(H)同様「我」と「わが身」両方の表現が見られるが、「我より上の人やはあるべき」という紫上の強い自尊心を語る際に用いられた自称は「我」であった。

一方、紫上が初めて自覚したのは「わが身」に果食う「思ふこと」であり、本場面においても紫上の「我」と「わが身」は使い分けがなされていると言えるだろう。同日の出来事である(K)は女三宮づきの乳母(中納言の乳母)の言葉を受けた紫上の謙遜であり、対面後の女三宮と紫上は「常に御文通ひなどして、をかしき遊びわざなどにつけても疎からず聞こえかはしたまふ」(九二頁)間柄になったと記されている。

以上が若菜上巻に見える紫上の自称表現である。反省したり、憂慮したり、謙遜したりするのは「わが身」であって「我」ではない。紫上の「我」は自身を光源氏第一の妻として、そして唯一の運命共同体として捉える際に用いられており、紫上の自尊心が覗く自称であると考えられる。

「二」二 紅葉賀と胡蝶巻

では、紫上の「我」と自尊心との結びつきは若菜上巻に限られた特徴なのだろうか。紫上が初めて「我」を用いた紅葉賀巻(A)について、三村氏は

紅葉賀巻までの紫上の「我」は、光源氏や周囲から教育された、受動的な「我」であった。(略) 光源氏に「我は我」と「おもひあがれ」と「教え」られることによって、紫上の嫉妬や孤独感といった負的な思惟は単純な優越感にすり替えられてしまったのである⁽⁴⁾

と述べているが、「この人々の男とてあるはみにくくこそあれ、我

はかくをかしげに若き人をも持たりけるかな」という言葉からは自身と女房とを比較し、光源氏を夫に持つ「我」を優位に位置付ける紫上の意識が窺える。これは光源氏第一の妻としての自尊心に通じる意識であるため、紅葉賀巻における紫上の「我」は周囲に「教え」られた受動的な「我」⁵⁾などではないと言えるだろう。

そして紅葉賀巻で芽吹いた紫上の優位意識はその後も揺らぐことなく、彼女は当然のように「我」を享受していく。第一部における紫上の「我」(B→E)からは紅葉賀や若菜上巻のような強い優位意識・自尊心こそ感じられないが、いずれも明石の君への嫉妬心にまつわる場面であり光源氏の妻としての紫上の姿が描かれている。かつ、紫上は玉鬘への想いを募らせる光源氏に対して「我」には「忍びがたう、もの思はしきをりをりありし御心ざまの、思ひ出でらるる節ぶし」があつたと言っており(E)、光源氏による明石の君や朝顔姫君への求愛―紫上にとっては光源氏の妻としての危機―を乗り越えたという自負が見える。つまり、光源氏を夫として認識した際に抱いた優位意識は光源氏の妻として過ごす中で揺るぎない自尊心へと変化し、若菜上巻においては紫上を支える意識として繰り返し確認されたのだと考えられる。

尚、紫上が最後に用いた「我」表現は(J)の場面から十一年後の御法巻に見られるが「なまいどましき下の心」(四九八頁)、つまり光源氏の妻としての競争心の存在が語られており、これは自尊心に通じる意識だと言えるだろう。しかし当該場面の紫上は「なまいどましき下の心はおのづから立ちまじりもすらめど、さすがに情をかはしたまふ方々は、誰も久しくとまるべき世にはあらざなれど、まづ我独り行く方知らずなむを思いつづくる、いみじうあはれな

り」(四九八―四九九頁)と競争心を越えた深い「あはれ」を感じており、光源氏の妻としての自尊心を振り所としていた若菜上巻の「我」とは趣を異にしている。この御法巻の「我」については、第四節にて検討したい。

三 紫上の「身」意識

先述の通り、倉田氏は紫上の「身」意識が三段階の変化で捉え得ることを明らかにしたが、語り手による表現である「うしろめたき絆だにまじらぬ御身」(P)や「わが御身」(Q)については言及されておらず、また自身の死を確定的とした「かくはかなかりける身」を含めた御法巻の「身」表現すべてを「最後の段階」としてまとめている点には再考の余地がある。加えて、第一部においては「ただ純粹な愛情関係のみによつて存在理由をもつことのできる一つの資格」⁷⁾に過ぎなかった紫上の身寄りのなさ、言い換えれば社会的立場や身分秩序が、第二部においては彼女の「身」表現を導く重要な要素へと変化している以上、紫上の「身」意識は彼女の「身」表現だけで捉え得ないのではないだろうか。本節では、若菜巻から御法巻に至るまでの紫上の状況や思惟にも着目しながら彼女の「身」意識の変遷を追っていきたい。

「三―一」動揺する紫上

紫上の「身」意識は次の四つの段階を経て変化していると考えられる。①自身の抱り所のなさに気付き、動揺する第一段階(F→K)、②光源氏の愛情の薄れを恐れ、将来を不安視する第二段階(L→N)、③光源氏を氣遣いながらも、後生のための出家を切望する第

三段階（O→Q）、④死期の近さを自覚し、死にゆく者としての視座を持ちながら死を迎える第四段階（R→T）である。

まず、第一段階の自称表現については前章にて既述のため割愛する。しかし「わが身」の「思ひあがり」を反省し、自身を「中空なる身」（I）・「数ならぬ身」（K）と称しながらも「我」の自尊心を繰り返し確認する紫上からは、女三宮降嫁に対する彼女の衝撃や動揺の大きさを窺うことができるだろう。また、増田繁夫氏は光源氏と朧月夜との逢瀬を察知しながらも「おほめかしくもてなしておはす」（八五頁）若菜上巻の紫上について

源氏と朧月夜とのことは知りながらも（略）女三宮の場合のようには問題にしていない。つまりこれは、紫上にとっての女三宮事件の意味は（略）源氏の北方という地位が奪われた、ということにあり、必ずしも源氏との愛情関係が裏切られたとか、男というものの対する不信任とかいった、心理的な次元のものではなかったことを示している。（略）紫上が真に希い求めているのは（略）六条院の北方という実体のある社会的地位なのである。⁸⁾

と指摘しており、女三宮降嫁に際する紫上の動揺には光源氏第一の妻としての立場の失墜が深く関係していると推測できる。つまり、紫上は唯一にして絶対であったはずの社会的立場を喪失して初めて「わが身」の抱り所のなさに気付いたのであり、この動揺こそが紫上の初期段階における「身」意識であったと考えられる。

「三」二 紫上の出家願望^①

用例L→Nは若菜下巻の前半部に見える紫上の「身」表現であるが、第二段階の「身」意識には紫上の出家願望が関連しているという特徴がある。

おほかたの世にも、あまねくもてかしづかれたまふを、対の上の御勢ひにはえまざりたまはず。年月経るまに、御仲いとうるはしく睦びきこえかはしたまひて、いささか飽かぬことなく、隔ても見えたまはぬから、「今は、かうおほぞうの住まひならで、のどやかに行ひをもとなむ思ふ。この世はかばかりと、見はてつる心地する齢にもなりにけり。さりぬべきさまに思しゆるしてよ」と、まめやかに聞こえたまふ（若菜下・一六六―六七頁）

右は紫上が初めて出家を願ひ出る場面であるが、朱雀院から女三宮への心遣いを頼まれていた新帝が女三宮に「御心とどめて思ひきこえたま」（一六六頁）ひながらも、光源氏からの愛情面では紫上が上回ると記されている点は非常に興味深い。その後、住吉参詣の際には明石女御と同乗する紫上の厚遇ぶりが語られるが「姫宮の御事のみぞ、なほえ思し放たで（略）内々の御心寄せあるべく奏せさせたまふ」（一七六―一七七頁）という朱雀院の影響もあつてか、女三宮の存在感も一層まさってゆく。そして女三宮が「二品になりたまひて、御封などまざる、いよいよはなやかに御勢ひ添」（一七七頁）ひ、「かく年月にそへて方々にまさりたまふ御おほえ」（一七七頁）につけて、紫上は「わが身はただ」ところの御もてなしに人

には劣らねど、あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなん、さらむ世を見はてぬさきに心と背きしがな」(L)と、再び出家を願うのであった。つまり、第二段階における紫上の出家願望は将来の不安に起因しており、第一段階で「わが身」の抛り所のなさを自覚した紫上は光源氏の愛情のみを頼りに生きる「わが身」の将来を不安視し、その不幸を回避する唯一の手段として出家を願うのだ。後生への願い以上に、自身の将来のための発心である点は紫上の「身」意識を考える上で重要ではないだろうか。

(M) は女楽の翌日、自身の半生を「無類の栄華と無類の憂愁を一身に具備する生涯¹⁰⁾」と語り、紫上の境遇を「君の御身には、かの一ふしの別れより、あなたこなた、もの思ひとて乱りたまふばかりのことあらじとなん思ふ。(略) 人にすぐれたりける宿世とは思し知るや」(二〇六―二〇七頁)と評した光源氏への返答である。紫上は続けて「まめやかには、いと行く先少なき心地するを、今年もかく知らず顔にて過ぐすは、いとうしろめたくこそ。さきさきも聞こゆること、いかで御ゆるしあらば」(二〇七―二〇八頁)と三度目の出家を願ひ出たが今回も許されず、「例のことと心やましくて、涙ぐみたまへる」(二〇八頁)のであった。「ものほかなき身」とは「自分を、源氏以外には頼り所もない孤立無援の身の上とする」¹¹⁾表現であり、当該場面からも将来への不安に起因する紫上の出家願望を窺うことができるだろう。また、本場面における紫上は、彼女を「人にすぐれたりける宿世」(二〇七頁)と評する光源氏に一度は同意するもすぐさま「心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふ」(二〇七頁)憂愁の一面を主張しており、光源氏とは別個の考えを持つ者としての姿が描かれている。そして(M)の同夜、発病直前の紫上

の述懐が語られる(N)においても紫上は昼間の「人にすぐれたりける宿世とは思ひ知るや」(二〇七頁)という光源氏の評に改めて納得し、自身を「人よりことなる宿世もありける身」(二二二頁)としながらも「人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身」(二二二頁)で世を終わらねばならぬことを「あぢきなく」(二二二頁)思い続けており、(M)の感懐を深めていく。また、紫上の「世のたとひに言ひ集めたる昔語どもにも」(二二二頁)女には結局は一人の頼みになる夫がいるらしいものののに、「わが身」は「あやしく浮きても過ぐしつるありさま」(二二二頁)だ、という述懐からは唯一の抛り所である光源氏さえも頼みにならない紫上の憂いが窺える。以上より、頼みにならない光源氏の愛情だけを抛り所として生きるしかない「わが身」の将来を悲観し、愛情が薄れる前に世を捨てたいという紫上の不純な出家願望¹²⁾こそが第二段階における紫上の「身」意識であると考ええる。

「三三三」紫上の出家願望②

(O) は発病・重篤を経て一度は「絶え入」(二三三頁)るも、なんとか「生き出でたま」(二三五頁)ひ、「ありしよりはすこしよろしきさま」(二四二頁)なる五月の場面である。光源氏は病氣平癒のために毎日「何くれと尊きわざせさせたまふ」(二四二頁)ものの「いとど暑きほどは息も耐えつついよいよのみ弱りたま」(二四二頁)ふ紫上に「言はむ方なく思し嘆」(二四二頁)く。そんな光源氏を見た「亡きやうなる御心地」(二四二頁)の紫上は「世の中に亡くなりなむも、わが身にはさらに口惜しきこと残るまじけれど、かく思しまどふめるに、むなしく見なされたてまつらむがいと思ひ

限なかるべけれ」(二四二)―(二四三頁)と「源氏への憐憫から、生きねばならぬとする氣力を奮い起す」¹³のであった。その後、紫上は「起き上がりて見出したまへる」(二四五頁)までに回復し、それを見た光源氏が「夢の心地」(二四五頁)のようだと思ふ涙を浮かべる場面が描かれるが、その際、紫上は光源氏への共感に発した歌を自ら詠みかけている。無理解な光源氏に対して隔てを感じていた第二段階の「身」意識からは一転、光源氏を氣遣い、寄り添う紫上の意識を読み取ることができるよう。尚、紫上が小康を得てから数ヶ月後、出家の本懐を遂げる朧月夜に対して「うらやましく」(二六五頁)思う紫上の姿が描かれるが、この場面から夕霧巻に至るまでの約三年間、紫上の心中は一切語られていない。当然、その間は紫上の「…身」意識も見られないため、(O)の「…身」表現から御法巻の「…御身」表現(P)までは約三年半の隔てがあることをここに断っておきたい。

(P)は発病から四年後、「いとおどろおどろしうはあらねど、年月重なれば、頼もしげなく、いとどあえかになりまさりたまへる」(四九三頁)紫上の述懐である。「うしろめたき絆だにまじらぬ御身」とは「死後に「うしろめたき絆」になるような子がいない」¹⁴身を指しており、自身の死によって光源氏を「思ひ嘆かせ」(四九三頁)ることのみが紫上の哀愁であると記されている。(Q)は断固として出家を許さない光源氏を「恨めしく」(四九五頁)思いながらもそれ以上に「罪軽かるまじき」(四九五頁)「わが身」の運命を恨んでおり、光源氏への氣遣いに通じる意識であると言えるだろう。尚、前述したように(P)(Q)の「…身」表現は自称ではないが、語り手による「…身」表現が用いられた理由としては、紫上が後世の

ための出家を願うようになったことが関係していると考えられる。発病前の紫上が光源氏だけを頼りに生きる「わが身」の将来を悲観し「御心ばへ」(若菜下・一七七頁)が衰える前に世を捨てたいという不安感から出家を願ひ出たことは先に確認した通りだが、発病後の紫上は「人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ」(若菜下・二二二頁)からも解き放たれ、ただ「後の世のため」(御法・四九三頁)だけに出家を願ひ続けている。この(後生を願う心)は語り手や読者にも共感し得るものであり、その上で、紫上は「もの思ひ」からの解放という特異な段階へと達しているのだ。つまり御法巻の「…御身」表現は紫上の「身」意識が俗世に生きる人々の普遍的な意識の延長線上にあることを示しており、この後生を願う一人の人間としての純粹な出家願望こそが第三段階における紫上の「身」意識であると考ええる。

「三一四」紫上と無常の世

紫上が出家を願ひ出る場面は(Q)以降描かれないが、彼女が「急ぎて」催した二条院での法華經千部供養は夕霧や今上帝、東宮や后の宮、花散里や明石の君までもが志を寄せるほど盛大な大法会であり、光源氏は「仏の道にさへ通ひたまひける御心のほどなど」(四九五頁)を「いと限りなし」(四九五頁)と思うばかりであった。(R)は法会の最中、「何ごとにつけても心細くのみ思」(四九六頁)う心情に耐えられなくなった紫上が明石の君に詠みかけた歌である。「わが身」を「惜しからぬ身」としながらも「薪尽きなん」ことを悲しむ紫上の「身」意識からは(O)「わが身にはさらに口惜しきこと残るまじ」や(P)「あながちにかけどめまほしき御命とも

思されぬ」などにはない、死を前にした者ならではの寂寥感が感じられる。そして法会から数ヶ月後「おどろおどろしからぬ御心地なれど、ただいと弱きさま」（五〇〇頁）の紫上を見舞うために明石中宮とその皇子・皇女たちが二条院を訪れる。「かくはかなかりける身」（T）とは死を確定的とする表現であり、過去の助動詞「けり」が用いられている点で特徴的だ。抛り所のなさからも、「もの思ひ」からも、将来の不安からも解放されたはずの紫上は死を前にして幼き生命に執着し「身」を惜しむ心を捨てきれない。以上より、無常の世に生きる人間の悲しさこそが第四段階における紫上の「身」意識であり、彼女の「身」表現の到達点であると考ええる。

四 御法巻の「我」意識

先述の通り紫上の「我」表現は若菜巻から十一年後の御法巻（S）で再び用いられるが、当該表現は「我」の後に「独り」を伴う点で他の「我」表現とは一線を画している。本節では最晩年の紫上用いた「我」の意味を明らかにするため、『源氏物語』における「我ひとり」用例との比較を行う。尚、用例は全部で八例あり、光源氏三例（①～③）、中の君三例（⑥～⑧）、紫上一例（⑤）、その他が一例（④）であった。

①（光源氏）我ひとりさかしき人にて（夕顔・一六九頁）

②（光源氏）我ひとりさかしがり抱き持ちたまへりけるに（夕顔・一七〇頁）

③（光源氏）我ひとりしも聞きおふまふけれど（紅葉賀・三四〇頁）

④ 枯れたる草の下より童胆のわれ独りのみ心長う這ひ出でて（夕霧・四四八頁）

⑤（紫上）まづ我独り行く方知らずなりなむ（御法・四九九頁）

⑥（中の君）我ひとり恨みきこえんとなやあらむ（宿木・四〇五頁）

⑦（中の君）我ひとり残りて（東屋・四〇頁）

⑧（中の君）我一人、もの思ひ知らねば、今までながらふるにや（蜻蛉・二二四頁）

①②は廢院の物の怪が夕顔を取り殺した場面であり、「さかしき人」が「我ひとり」しかないという光源氏の気持ちに即した表現である。③についても「我ひとり」が典侍の歌を聞いてしまったことを嘆いており、光源氏の「我ひとり」はその場に「我」が「ひとり」しかないという客観的な状態を表す際に用いられている。

④は一条御息所死後の小野の山荘を描く場面であり「枯れたる草の下」から童胆が「われ独り」の命の長さを見せ、のびのびと「這ひ出でて露けく見ゆる」などという「例の」秋の季節の風情が記さ

れる。『新編日本古典文学全集』注には「茎の長いのと、他の草花のあとまで、長期間咲くのをかけた表現。『竜胆は枝ざしなどもむつかしけれど、異花どものみな霜枯れたるに、いと花やかなる色あひにさし出でたる、いとをかし』（枕草子・草の花は）」とあることから、竜胆の命の長さは当時から認識されていたと考えられる。風景描写とはいえ「われ独り」と生命とが関連付けられた初例として興味深い場面である。

⑤の場面については既述のため詳細は割愛するが『源氏物語』に登場する人物として初めて「我独り」表現と人間の生死とを結びつけたのが紫上である点は注目すべきだろう。⑥は匂宮と六の君との結婚に由来する中の君の苦悩が語られる場面であり、自身の境遇を周囲に取り沙汰されたくない中の君の思いを付度した語り手の言辭である。そして⑦は父・八宮と姉・大君に、⑧は二人に加えて腹違いの妹・浮舟に死に遅れ「我ひとり」が生き存える悲しみを抱える中の君の思惟が語られる場面であった。

以上が『源氏物語』に見える「我ひとり」用例である。「我ひとり」はその場に「我」が一人しかいないという客観的な状況を示す表現から、生命や生死、生き方などといった人生観・死生観と結びつく表現へと変化しており、その起点は御法巻の「我」表現であると言えるだろう。加えて、意味が変化した後の「我ひとり」を用いたのは紫上と中の君のみであり、両者は「我」の危機―紫上にとっては女三宮の降嫁、中の君にとっては六の君と匂宮との婚姻―に対して嫉妬や苦悩を隠匿し、周囲の人々に悟られまいと厳しく自制した女君であるという共通点があった。「我独り」で死にゆくか「我一人」で生き存えるかという点では対照的であるものの、「我ひとり」思

う系譜の起点となったのが御法巻の「我」である点は注目すべきではないだろうか。

また、御法巻の紫上は「露」が「消えはて」るような静かで美しい死を迎えるが、彼女は若菜下巻において《一度目の死》から蘇生しており、当該場面は紫上にとって《二度目の死》であった。『源氏物語』における死はそれ自体で重要な意味を持つが、一度目の死を迎えた若菜下巻では紫上と同じく「最高の条件」を揃え、最も「輝かしい生涯」を送ったとされる女君・藤壺の臨終場面と同様、死の前にした苦しみや述懐が語られていた。しかし、御法巻においては苦しみも、執着も、「恨み」の存在も語られず、紫上はただ「我」は「独り」であるという強い自己意識だけを抱いて、《二度目の死》を迎えるのだ。社会や他者との関係性の中で「我」を捉えてきたはずの紫上が感じた、絶対的な自他との区別。これこそが御法巻における「我」の特徴であり、紫上が到達した「我」意識であると考え

五 おわりに

『源氏物語』における紫上は「人にすぐれたりける宿世」(若菜下・二〇七頁)「人よりことなる宿世」(二二二頁)「生けるかひありける幸ひ人」(二三八頁)と語られ、類稀なる幸福を手にした理想的な女君として位置づけられている。確かに、父や祖母という後見を失った幼い姫君が二条院へ迎えられ「一人の人」として光源氏の寵愛を受ける点は「物語に、ことさら作り出でたるやうなる御ありさま」(賢木・一〇三頁)であり、その「幸ひ」ぶりには目を見張るものがある。しかし、その裏には光源氏の妻としての「我」の喪失に悩

み、嘆き、苦しみながらも、全てを受け入れ、全てを愛し、ただ一人の「我」として主体的に生きようとした彼女の人生があった。

幸福とは、人生とは、人間とは何か。紫上が到達した答えは定かではない。しかし紫上の思考の軌跡は「我」「身」「わが身」表現から辿ることができ、この内面こそが彼女を唯一無二の「女主人公」たらしめているのではないだろうか。

以上より、紫上の自称表現は「我」から「身」という単純な変化だけでは捉え得ず、紫上の特別性を探る上での重要な手がかりであると考える。

注(1) 三村友希「紫上の〈我は我〉意識」(『姫君たちの源氏物語 二人の紫上』

翰林書房 二〇〇八年)

(2) 倉田実『わが身をたどる表現』論―源氏物語の降着語世界―(『武蔵

野書院 一九九五年)

(3) 倉田実 注(2)前掲論文

(4) 三村友希 注(1)前掲論文

(5) 三村友希 注(1)前掲論文

(6) 倉田実 注(2)前掲論文

(7) 秋山虔「源氏物語の登場人物の性格―紫上の初期についてのおぼえ書―」(『国文学解釈と教材の研究』六卷六号 一九六一年五月)

(8) 増田繁夫「若葉巻の紫上」(『国語と国文学』七五卷一―二号 一九九八年十一月)

(9) 後藤祥子「『若葉』以後の紫の上」(『源氏物語研究』七卷 一九七九年十二月)

(10) 『新編日本古典文学全集 源氏物語』若葉下・二〇六頁注

(11) 『新編日本古典文学全集 源氏物語』若葉下・二〇七頁注

(12) 後藤祥子 注(9)前掲論文

(13) 『新編日本古典文学全集 源氏物語』若葉下・二四三頁注

(14) 倉田実 注(2)前掲論文

(15) 『新編日本古典文学全集 源氏物語』御法・五〇一頁注

(16) 上田英代・村上征勝・今西祐一郎・樺島忠夫・上田裕一編『源氏物語語彙用例総索引自立語篇五』(勉誠社 一九九四年)

(17) 藤本勝義「源氏物語における死と救済」(『清泉女子大学人文科学研究紀要』第三六号 二〇一五年)

(18) 阿部秋生「六条院の述懐(三)」(『東京大学教養学部人文科学科紀要』一九七二年五月)

(19) 阿部秋生 注(18)前掲論文